

INTERVIEW

経験ない規模の浸水も

当時、東消防署で災害対応をしており、屋根が飛びそうなどの通報に出動したり、避難していない人がいないかノックロールするなど、出動し戻ってきてはまた次の出動と休みなく、隊員と車両はフル稼働の状態でした。通常は出動するメンバーは固定されているのですが、この日は動ける者で出動するような場合もありました。

20日の18時ごろ、河辺川流域が増水・氾濫し、工場に取り残された人がいるとの通報を受け出動しました。現場では胸の高さまで水に漬かり、流速も早く、足を取られれば自分たちも命はないという状況でした。ボードなどで無理に避難すると流される可能性があるかと判断し、水位が下がるのを待つことにしました。大浦地区であの規模の浸水が起こったのは初めての経験で、台風の規模の大きさを物語っていました。

夜が明けると消防本部は由良川で水没したバスの乗客の皆さんを海上自衛隊や海上保安庁のヘリから引き継ぎ、病院へ搬送するなど、救急での出動が増えていきました。



東消防署 酒井 忠大さん

INTERVIEW

水害と向き合って生きる

台風当日は、大波の職場から上東の自宅へ帰ろうとすると道路が寸断されていて、家にいる家族に電話すると「危険だから今は帰ってこないで」と言われ、家に帰れたのは翌日の昼前でした。この台風被害で加佐全体に「もう水はこりごりだ」という思いが高まり、輪中堤の話が次々と進んでいきました。志高・水間に続いて、私の住む上東地区も輪中堤の築堤に向けて話し合いが始まりました。農地が堤防になることや堤防の外側の農地へ行きにくいなど、築堤に消極的な人もいましたが、やはりあの台風を思い出すと背に腹は代えられないということもあって、地域として合意に至りました。その後、大きい台風や豪雨があるたびに「堤防がなければどうなっていたか」と安全と安心を感じられています。しかし、内水被害などの問題も残っており、由良川といかに付き合っていくかは加佐地域にとって避けられない宿命なのかとも思っています。



元上東築堤委員会委員長 岸田 守さん

平成16年ってどんな年？

◆アテネ五輪開催。ゆずの「栄光の架橋」がNHK公式テーマソングに。北島康介選手の「チョー気持ちいい」が流行語に◆新札が発行される(野口英世、樋口一葉、福沢諭吉)。旧札は夏目漱石、新渡戸稲造、福沢諭吉◆東北楽天ゴールデンイーグルスが新たにプロ野球に参入

輪中堤

台風23号を受け、輪中堤(集落を囲うように設置する大規模な堤防)の建設や宅地かさ上げの水防事業整備期間が大幅に短縮されました。また、加佐地域だけでなく、高野川流域や伊佐津川河口部などで総合的な治水対策も進められています。



▲右写真中央部に築かれた輪中堤

50年ぶりに市を襲った大災害

平成16(2004)年10月20日から21日にかけて本市を襲った台風23号。由良川などが氾濫したほか各地で土砂災害や暴風の被害を受けた。その後、これを教訓にハザードマップの作成や輪中堤の設置が進んだ。

平成の災害

- 19年 ダイワボウ舞鶴工場火災が発生。鎮火まで13時間を要する平成最大規模の火災となった
- 24年 豪雪で、観測史上最高となる市街地87㌔の積雪。松尾で224㌔の積雪
- 25年 台風18号で由良川など市域河川が増水。全壊、半壊、床上浸水が多数発生
- 29年 台風21号によって市内全域で浸水被害多数発生
- 30年 7月豪雨。市内で死者1名。由良川や高野川、伊佐津川で増水。各地で土砂災害も国道27号真倉で大規模な崩落発生



下東でも築堤が進んでいる

丸田東では宅地かさ上げ事業が進んでいる

丸田東

上東

八田

現在点線のように輪中堤が設置されている

大川橋

▲由良川が増水で山裾まで一面が浸水した(福知山河川国道事務所提供)

その日、舞鶴を猛烈な暴風雨が襲い、6人もの尊い人命を一夜のうちに奪い去った。大地を削り、斜面を崩し、一面に泥土とがれきを残して東へと通り過ぎて行った。これほどの被害は戦後最大の被害をもたらした昭和28年台風13号以来、実に51年ぶりという。由良川では、20日午前中まで2層程度であった大川橋の水位が21日深夜2時頃には最高水位8㌔10㌔まで上昇し、流域の一面が濁流に飲み込まれた。志高では立往生した観光バスが水没。暗闇と激しい水流からヘリもポートも近寄れず、10月末の冷たい雨風の中、乗客ら37人がバスの屋根の上で一夜を明かした。翌朝、全員が救助された様子は報道ヘリによって全国へ発信された。

台風が去り、疲れた心と体に待っていたのは「後片付け」であった。道路・河川・橋梁で563か所、建物被害で3,406か所などの甚大な被害。ただ、市内外から駆け付けた多くのボランティアや他自治体、自衛隊などからの支援。そして、全国から寄せられた支援物資などの温かい人々の思いがあった。誰もが復旧作業に全力を注いだ。

翌年5月には由良川流域のハザードマップが作成され、加佐地域で全戸配布された。由良川下流域で取り組まれていた輪中堤の建設や宅地かさ上げなどの水防事業もこの災害を教訓に大きく加速。また、水没したバスの話は、絵本や紙芝居などになって子ども達に伝えられた。悲しい記憶は忘れたくとも、教訓は忘れてはならないという思いが人々の胸にはあった。

あれからおよそ15年。台風や豪雨が全国各地を襲い、被害が絶えない。一方、市では、明るいうちから避難情報を発表するなど、早め早めの避難を呼びかけている。また、交通機関の運休やイベントなどの中止は以前より早い段階から発表されるようになったと感じる。全国的に災害に対する考え方や対応が変わってきているのを感じた。大きな工事や整備には時間がかかるが、災害は待つてはくれない。無理をしない、命を守る。という考え方が人々の心へ根付いてきているのではないだろうか。